

天皇皇后両陛下の満洲開拓民への思いについて考える

大類 善啓

長野県は周知のように開拓民として満洲に渡った人たちが日本で一番多く、その数はおよそ3万3千人といわれる。大日向村（現佐久穂町大日向地区）からは、分村移民第1号として満洲に入った。1945年のソ連参戦時には800人近くが入植地にいた。しかし帰国できたのは半数だった。土地や家を処分して満洲に渡った人たちに、親戚も諸手を挙げて歓迎するわけではなく、故郷にいる場所もなかった。そんな経緯もあり、満洲から引揚げた人たちは、軽井沢町の浅間山麓に入り開墾し、新たに大日向地区を作ることになった。満洲では中国人や朝鮮人たちが開拓した土地に入植したが、今度は本当に自ら開拓したのだ。その大日向地区を、天皇皇后両陛下は今年（2010年）8月24日ご訪問された。

8月25日付読売新聞長野県版は、この事実を次のように報道した。

両陛下は、＜午後には、戦後、満洲（現中国東北部）から引き揚げた人たちが開拓した同町（注：軽井沢町）大日向地区で、キャベツやレタスの畑を散策され、農作業をしていた滝上文雄さん（69）のかやぶき屋根の家に立ち寄られた。滝上さんは、自家製のトウモロコシ5本を手渡したといい、「物腰がやわらかい方で、お話できたことが夢のよう」と話していた＞

実は両陛下は、2005年の9月2日にも、旧満洲の七虎力地区^{チーフリ}に入植した人たちが戦後、栃木県的那須町に開拓した千振開拓地^{ちぶり}を訪問されている。その時には、戦争時代のことをこれからの若い人たちに伝えたいという皇后美智子様のお考えもあったようで、秋篠宮様とご長女の眞子さまも同行された。



両陛下を「開拓の碑」に案内する中込敏郎さん(右端)。「戦中戦後のことに触れてほしい」という皇后さまの意向で、秋篠宮さまの長女眞子さま(左端)も同行された＝2005年9月、栃木県那須町で

東京新聞 05年11月22日付

(左上写真) 大日向開拓地の野菜畑を散策される天皇皇后両陛下 (写真提供、共同通信社)

若い世代に戦争体験を伝えたい

昨年（2009年）の11月12日、天皇陛下は、国立劇場で行われた「天皇御在位20年記念式典」のご挨拶で、次のように語られている。

「先の戦争が終わって64年がたち、昨今は国民の4人に3人が戦後生まれの人となりました。この戦争においては、310万人の日本人の命が失われ、また外国人の命も多く失われました。その後の日本の復興は、戦後を支えた人々の計り知れぬ苦勞により成し遂げられたものです。今日の日本がこのような大きな犠牲の上に築かれたことを忘れることなく、これを戦後生まれの人々に正しく伝えていくことが、これからの国の歩みにとり、大切なことではないかと考えます」（宮内庁HPより）

両陛下は、戦後育ちの人たちに戦争体験がしっかりと伝わる重要性を認識してご挨拶された。

この記念式典に先立つ11月6日の記者会見では、在日外国報道協会代表の「両陛下は、日本の将来に何かご心配をお持ちでしょうか。お考えをお聞かせください」という質問に対して、天皇は、高齢化が進み経済が厳しい状況に日本はなっているが、一つひとつ克服されることを願っていると語った後、こう続けられた。

「私がむしろ心配なのは、次第に過去の歴史が忘れられていくのではないかとことです。昭和の時代は、非常に厳しい状況の下で始まりました、昭和3年、1928年昭和天皇の即位の礼が行われる前に起こったのが、張作霖爆殺事件でしたし、3年後には満洲事変が起こり、先の大戦に至るまでの道のりが始まりました。第1次世界大戦のベルダンの古戦場を訪れ、戦場の悲惨な光景に接して平和の大切さを肝に銘じられた昭和天皇にとって誠に不本意な歴史であったのではないかと察しております。昭和の60有余年は私どもに様々な教訓を与えてくれます。過去に歴史的事実を十分に知って未来に備えることが大切と思います」（宮内庁HPより）

天皇陛下の言葉を噛みしめたい

「日米同盟」という錦の御旗を楯に、ブッシュ政権の尻馬に乗っかり、イラク戦争に「人道支援」という名の下で自衛隊の派遣を決めたのは自民党の小泉政権だった。某自衛隊の幹部は、「イラクの現場に立てば、自衛隊が戦争に参加したというのはまぎれもない事実だということがわかりますよ」と語っている。民主党の菅政権になっても、「日米同盟強化」の一点張りだ。一方、“憲法改正”を唱え、自衛隊の海外派遣に頓着しない戦後世代の政治家も増えている。

『CIA秘録』を書いたニューヨーク・タイムズ記者ティム・ウィナーは、直接、岸信介に金を渡したCIAの人間から取材し、「岸信介元首相がCIAのエージェント」であったことを明らかにしている。実はこの9月、渋谷の小さな映画館でドキュメンタリー映画『ANPO』を観た。日本生まれ日本育ちのアメリカ人女性、リンダ・ホーグランドさんが、1950年代から60年代にかけて、朝倉摂や中村宏、池田龍雄などの画家たちの、当時の政治状況に対する抵抗の表現活動を紹介しながら、日本とアメリカとの関係を問い直した作品である。

この映画でリンダさんは、ティム・ウィナーにもインタビューしている。彼はそこで、日米関係を、<卑俗な表現でいえば「ヒモ（アメリカ）と娼婦（日本）の関係だ>と語っている。「日米同盟の強化」などという言葉は、ティム・ウィナーがいう表現に倣うならば、「ヒモと娼婦の関係を更にしっかりと強化しよう」ということなのだ。

昨今の政治家の言動の軽さ、戦争体験をどう若い世代に伝えていくかという、日本の平和にとって誠実な問題意識も希薄な国会議員先生のことを思うと、もう少し真摯に両陛下のお言葉を噛みしめてほしいと思う。

両陛下と『嗚呼 満蒙開拓団』

さて、この両陛下の大日向地区訪問のニュースをテレビで知った仕事仲間の一人が、美智子様はもしかしたら、映画『嗚呼 満蒙開拓団』をご覧になったのではないかと知らせてきた。そんなことはないと思ったが、映画を演出された羽田澄子さんに電話を入れた。そうすると以前に、羽田さんが創られた『歌舞伎役者 片岡仁左衛門』を、美智様が知人を介してご覧になりたいというのでお送りしたことがあり、お礼状もいただいたということだった。羽田さんは、ぜひ美智様に『嗚呼 満蒙開拓団』をご覧になっていただければ嬉しいとのこと。私ももちろんご覧いただきたいと思い、親しくお付き合いしているジャーナリズムのある方にご相談したところ、その方は天皇陛下ともご縁があり、美智様にDVDをお渡しできるかもしれないという言葉をいただいた。そこで美智子様宛てに私からの手紙を添えて、映画のDVDを会報「星火方正」などの資料と一緒にその方にご送付して依頼した。そしてその方から、確かに送りましたという言葉ももらった。その後11月中旬、その方から、両陛下ともDVDをご鑑賞された模様だとの報告をいただいた。私はすぐにそのことを羽田さんにお伝えした。羽田さんもたいへんお喜びになったことは言うまでもない。

とここまで書いたところ、その方からお手紙が来た。そこには、羽田さんにお渡ししてほしいと資料が入っていた。それは前述した、即位20周年記者会見の全文だった。

しばしば近隣諸国と歴史認識の相違で問題を起こす日本の政治家諸氏のことを考えると、お二人がしっかりと表明された「歴史観」は際立って輝いている。実は千振開拓地訪問に先立つ05年6月、両陛下はサイパンへも慰霊の旅をなさっている。それは千振開拓地訪問同様、両陛下の強い希望だった。

満洲開拓民の体験者はもとより、戦争体験者も減少しつつある。高齢化が進み、日本人公墓を参拝するかつての開拓団の人たちから、「参拝することも、もうこれが最後です」という愁いや嘆息の声を聞く。歴史を次の世代、若い世代に語り継ぐことが難しくなっている今、天皇皇后両陛下が次の若い世代を伴い、満蒙開拓団のゆかりの人たちを訪ねた意味は極めて大きいと考える。

両陛下の深い歴史認識と平和への並々ならぬ強いお気持ちを改めて感じ、襟を正さなければいけないと思った次第である。

(おおるい・よしひろ：本会事務局長)